

前回 (162 回、2018 年 2 月 10 日実施) のプロトコル (出席者 5 名: 佐野、新木、田中、本田、桑原)

1、前回のプロトコルと哲学的問い (担当と報告: 新木氏)

(『西田幾多郎全集 第 2 巻』「自覚に於ける直観と反省」、「跋」346 頁～350 頁)

2、『西田幾多郎全集 第 2 巻』「自覚に於ける直観と反省」、「序」の最後 (10 頁～11 頁) を読む

「此書は余の思索に於ける悪戦苦闘のドキュメントである。……刀折れ矢竭きて降を神秘の軍門に請うたという譏を免れないかも知れない。併し余は兎に角眞面目に一度余の思想を清算して見た。……余と同様の問題を有し、余と同様に解決に苦しむ人ならば、此書は縦、何等の光明を與ふることなくとも、多少の同情を買い得るであらう。」

3、『西田幾多郎全集 第 4 巻』「働くものから見るものへ」、「序」3 頁～6 頁を読む

①「北條時敬先生に此書をさゝぐ」の献呈文: 唯一の献呈書、四高の恩師 (数学、禅、旧制山口高校への就職)。

②「善の研究」(第 1 巻) では「純粹経験を基として物心の對立、關係等の問題を解かうとし」、

「自覚に於ける直観と反省」(第 2 巻) ではフィヒテに似た主意主義の立場で考え、

「意識の問題」(第 3 巻) では「知情意の區別及關係等の問題」を、「藝術と道德」(同) では藝術・道德の對象界及相互の關係等を論じた」が一

「自覚に於ける直観と反省」を書いた時から「意志の根柢に直観を考へて居た、働くことは見ることでであると云ふ様なプロチノス的な考を有つて居た。…「藝術と道德」を書き終つて、宗教について考へて見ようと思ふに至つて、益、絶対意志を究極の立場と考えるようになった。まず「直接に與へられるもの」は、単なる質料ではなく形相を含んだもの、創造的なものでなければならぬと考え、「物理現象の背後にあるもの」では根柢に意志の自覚あることを論じ、「内部知覚について」では外部知覚も一種の内部知覚と見るためにアリストテレスのヒポケーメノン=基体により主語、本体、主観の結合統一を企図したが、働くものや知るものと、アリストテレスの基体の關係を求める必要がある。そこで「働くもの」において述語的なものが主語となるということによって働くものを考え、「場所」で超越的述語を意識面と考えることで、論理的基礎附の端緒を開き得た。フィヒテ的な主意主義から直観主義に転じ、「すべてのものの根柢に見るものなくして見るもの」を考えたい。

③日本文化を声高に叫ぶ時代風潮に対する思い、論理 (コトバ) が与えられない苦しみを経て、ギリシャ哲学により「一転」し「場所」の考えに至った経緯。

「形相を有となし形成を善となす泰西文化の絢爛たる発展には、尚ぶべきもの、學ぶべきものの許多なるは云ふまでもないが、幾千年來我等の祖先を孕み來つた東洋文化の根柢には、形なきものの形を見、聲なきものの聲を聞くと云つた様なものが潜んで居るのではなからうか。我々の心は此の如きものを求めて已まない、私はかゝる要求に哲学的根據を與へて見たいと思ふのである。」(「昭和 2 年 7 月」の日付)

※参照、『善の研究』3 番目の「序」(現岩波文庫「版を新にするに當つて」9～10 頁、「昭和 11 年十月」の日付)

「今日から見れば、この書の立場は意識の立場であり、心理主義とも考えられるであろう。然非難せられても致方はない。しかしこの書を書いた時代においても、私の考の奥底に潜むものは単にそれだけのものでなかったと思う。純粹経験の立場は「自覚における直観と反省」に至つて、フィヒテの事行の立場を介して絶対意志の立場に進み、更に「働くものから見るものへ」の後半において、ギリシャ哲学を介し、一転して「場所」の考に至つた。そこに私は私の考を論理化する端緒を得たと思う。

「形相を有となし形成を善となす泰西文化」=眞実にあるもの、かたちに向かうものとしてのギリシャ哲学: プラトン (コーラ)、アリストテレス (基体)

4、「直接に與へられるもの」「一」(9 頁～10 頁 4 行目) を読む (大正 12 年 9 月執筆)

「直接に與へられるものとは如何なるものを云ふのであるか。」=「純粹経験」

「我」にいま直接に媒介なしに与えられているもの、「思惟せない前の経験」であり、「過去にあつたもの、未来に起るべきもの」でもなく「現實に與へられるもの」である。

※次回は、12 頁 13 行目「此の如き思惟に對して與へられるものは…」から 13 頁 13 行目「藝術的形成作用の性質を有すると考へることができる。」迄。飛ばして 22 頁 12 行目「意識現象はそれが如何に小なるものであつても……」から終わり迄。

5、哲学的問い

西田が「場所」の考えにたどり着くまでにはギリシャ哲学（のロゴス）を介する必要があったとは、東洋文化の根柢である「形なきものの形を見、聲なきものの聲を聞くと云つた様なもの」を求める名辞（ロゴス）以前への希求と矛盾するのではないか？ そこに哲学＝「泰西文化」の限界が見えるのではないか？